

～大久保利貞(利通の後弟)の書～

窮無遊

明治三十八年十一月、凱旋之途次、於大連西今岡、為有馬先生、大久保利貞

無窮に遊ぶ『莊子』内篇、逍遙遊第一に出てくるフレーズです。阿部吉雄他著『老子・莊子上』明治書院、1988年の142頁には、通釈として、「無限の地に遊ぶ」とあります。

凱旋の途次、大連の西今岡に於いて(中国大連の西方にある今岡という地名)
有馬先生のため、大久保利貞

この書の揮毫された時代は、日露戦争(1905年9月終戦)に勝利した年です。
無限の地に遊ぶとは、広い大地に展開していく日本国の洋々たる当時の雰囲気の色濃く示しています。今回、明治150年を記念して本書を掲示しましたが、幕末、維新、明治とこの国の礎をつくられた英霊の方々に謹んで哀悼の誠をささげるものであります。

利貞の書は、鹿児島県始良市山田の「凱旋門」、同霧島市式根の「明治三十七八年役殉忠碑」、「明治二十七八年及同三十七八年戦役記念碑」、さらには山形県高富町の「招魂碑」にも刻まれており、書家として高名だったことが忍ばれます。山形といえば、旧庄内藩士たちが西郷隆盛から直接聞いた教訓や思想を一冊の本にまとめて1890年1月に刊行した「南洲翁遺訓」が有名です。

大久保利貞は、1846(弘化3)年に生まれ1918(大正7)年に亡くなりました。利貞は、薩摩の人で、後備歩兵第三旅団長などを歴任した軍人、陸軍中將であり、維新の三傑の一人である大久保利通(1830～1878)の16歳年下の後弟(利通の父の弟の子)でした。軍人退官後は、霧島神宮の宮司を務めました。本書は、小生の祖母、永田貴美(旧姓:伊地知貴美、明治21年-昭和51年)から後代に残す様にと厳命されたものです。島津家の要職であった伊地知家の子孫である貴美が、霧島神宮宮司時代の利貞より贈られたと推察されます。



株式会社新日本科学
代表取締役会長兼社長
永田 良一